チーム医療

平林　大輔（東京北社会保険病院）

「チーム医療」について語るとき、必ずといっていいほど医師－看護師間の関係が話題になる。これまでの経験から、医学と看護は対立するものという考えをもっている医師や看護師も少なくはなく、それがゆえに比較対象となるのかもしれない。だが、「チーム医療」とは何のために行うのか、誰のためのものなのか。そもそも、「チーム医療」とは何なのか。誰もが漠然とした答えを持っているにもかかわらず、共通した認識で医療を行えていないことも多い。

一般的に「チーム」といったとき、それは「同じ目的や目標の達成を目指すための集団」というような意味になる。だとすると、「チーム医療」とは、そのような「チーム」によって行われる医療、ということになるだろう。

ここで強調したいことが二つある。一つは、医師や看護師といった職種は、同じ目的を達成するための役割の違いでしかないということ。言い方を変えれば、同じチームの中でポジションが違うだけ、ということになる。私自身、看護師から医師へと職を変えたが、それは単なるポジションチェンジくらいの認識しか持っていない。ポジションが違っても達成するべき目的は同じなはずである。

もう一つは、患者自身もチームのメンバーだということ。今までの医療では、ともすると患者を「お客様」扱いしてきた。だが、全ての医療をビジネスライクに行うことは、やはり難しい。たとえば、支払い能力のない患者を、それだけの理由で全て断ることができるのか、甚だ疑問である。それよりもむしろ、患者も我々も同じチームのメンバーであり、「医師」や「看護師」と同列に「患者」というポジションがある、と考えた方が、より良い医療を実現することができるのではないだろうか。

個々の選手が技術を磨き、そこにチームプレイが加わるとより優れたチームができる。同様に、各々の職種が専門性を高め、さらに横の連携を強めれば、チーム全体としてはさらに高い目標に向けて前進することができる。「何をしたいのか」、「何ができるのか」、「何をしなければならないのか」というアイデンティティと、「（自分が相手に）何をしてほしいのか」という働きかけを組み合わせることで、より高見を目指せるチーム医療が実現できると、私は考えている。